



「龍」に関することわざ：龍をどう捉えてきたか

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-11-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 馬場, 俊臣 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007450

「龍」に関することわざ

——「龍」をどう捉えてきたか——

馬場俊臣

1 はじめに

「ことわざ」は、古くから言い伝えられてきた、教訓・風刺・真理などを含んだ短い言葉であり、様々な事物に対する人々の見方や捉え方が反映されている。

馬場（2010）・馬場（2011）・馬場（2012）では、それぞれ、「牛」「虎」「兎」に関する日本のことわざを取り上げ、ことわざに反映された牛・虎・兎に対する人々の捉え方の特徴を見た。本稿では、「龍（たつ、りゅう）」¹⁾に関することわざを取り上げ、「龍」に対するどのような捉え方が見られるかを示したい。

本稿で取り上げることわざは、『故事俗信ことわざ大辞典』（第一版及び第二版）（尚学図書（編）（1982）及び北村（編）（2012））に基づいている。ただし、各地の俗信・俗説等は取り上げない。

同書（第一版）の「総語彙索引」の「たつ〔辰〕」「たつ〔竜〕」「りゅう〔竜〕」の項には計50句のことわざ（俗信・俗説、言葉遊び・しゃれ、慣用句、故事を含む）が挙げられており（それぞれ7句、5句、39句）、十二支の動物名を含むことわざの中では少ない方である。

「辰（たつ）」は十二支の一つで、年月日、方角、時刻等の呼び名に用いられる。「龍（たつ、りゅう）」は「想像上の動物」であり、「体は大蛇に似て、背に八一の鱗（うろこ）があり、四足に各五本の指、頭には二本の角があり、顔が長く耳を持ち、口のあたりに長いひげがあり、喉下（のどもと）に逆さ鱗を有する。水に潜み、空を飛んで雲を起し雨を呼ぶ霊力があるとされる。りゅう。りゅう。」（『日本国語大辞典 第二版』「たつ【龍】」の語釈）とある。

「画龍点睛を欠く（物事の最後の仕上げを欠くこと）」「雲は龍に従い風は虎に従う（物事は相似たものが一緒になったり、一緒になろうとしたりして、うまくいくものであるということ）」など中国の故事に基づく成語も広く知られているが、本稿では、日本のことわざを対象とするため、中国の故事成語などに基づくことわざは取り上げない²⁾。

以下、龍に関することわざにおいて注目された事柄とその特徴を分類し、ことわざを例示していく。（ ）内に示した解釈は『故事俗信ことわざ大辞典』（第二版）に基づいている。関連する情報も随時補う。

2 龍の特徴

(1) 水 [水に住む] [強者・英雄] [危険]

- ① 龍住む池は水涸れず（龍が住んでいる池の水は決してなくなる。）
- ② 龍の水を得る如し／龍に水（龍が水を得て昇天するように、強いものが一層勢いを得ること。）
- ③ 龍（たつ）棲む淵は水涸れず、玉ある岸は水清し（君子の徳は自然に周囲の人々を感化して、よい環境を作るとのこと。）
- ④ 虎の子を野に放し、龍に水を与える（災いをもたらすものに利を与える。後に危険な目にあうことをする。）
- ⑤ 龍を淵へ放す（一度取り押さえたものに挽回の機会を与えてしまう。災いの根を後に残すこと。）

龍と水との結び付きは強い。中国における龍と水の繋がりについて次のような記述がある。「龍の性質のなかでも重要であるのは水との関係である。(中略) 龍は古くから水棲の動物とみられていた。(中略) 中国の龍には雲がつきものである。(中略) 龍は雲を吐くとか、雲に乗って天にのぼるとかみられていたのだが、龍が龍らしい活動をするには雲の水気が必要でもあったのではなかろうか。(中略)このような性質と関連して、龍は水を呼び、雨の因、洪水の因と考えられてきた。」(荒川(1996) 21-22頁)

また、日本における龍と水の繋がりについては次のような記述がある。「(日本)の龍は、本格的には平安時代にその姿を現した。そのイメージは、陰陽道の龍や仏教の龍王と(日本)の神の蛇身とが複雑微妙に絡み合っており、さまざまな姿をとって現れる。そして、龍・龍王・龍神は主として水神として、風雨を起こす存在として、中世(日本)のなかに深く、広く根づいていった。中世の人々は、龍・龍王・龍神に対して雨乞いをし、あるいは大雨が止むようにと必死の祈りを捧げたのであった。それだけではない。龍はしばしば地震を起こす存在であり、また、龍は中世(日本)の神々の姿であり、蒙古襲来や東夷の蜂起などの危機に際しては、龍の姿をした神々が(国土)を守護するために血みどろになって戦った。龍は、中世(日本)の(国土)や(大地)と不可分な存在となったのである。」(黒田(2003) 134頁)

なお、地震に関しては、「しかし、地震を起こすのは鯀ではなかったのか、そう読者は思われたことであろう。確かに、われわれの常識では地震を起こすのは大鯀である。近世つまり江戸時代のある時期から、龍は大鯀へと変身していったのである。それはいったいつ頃のことなのか。(中略)要するに龍は、中世から大鯀でもあった。だから龍はいつでも大鯀に変身できたし、事実、近世のある時期から、地震を起こす存在はもっぱら大鯀とされていったのであった。」「龍から大鯀への変化が十七世紀後半に進行し、十八世紀初頭には定着していったことを推定できる。」(黒田(2003) 213-214頁及び218

頁) とのことである。

(2) 雲・雨 [雲に添う／雲を起こす] [雨を降らす] [強者・英雄]

- ① 雲となり龍となる (龍が雲に添うところから、男女の仲などが大変睦まじいこと。)
- ② 龍吟ずれば雲起こる／龍の吟ずるよう (龍が雲を呼ぶように、英雄の決起に多くの同志がこれに従う。同類が相応じ従う。)
- ③ 龍の雲を得る如し／龍に雲 (龍が雲を得て昇天するように、英雄豪傑などが機を得て、盛んに活躍すること。)
- ④ 龍 (たつ) も昇るべき風情 (今にも雨が降ってきそうな空模様。)
- ⑤ 龍の子は小さしと雖も、能く雨を降らす (将来大人物となる人は幼時から他とは違った優れた能力を示すものだ。)

雲・雨・雷神との繋がりがだが、「竜はまた雷神ともかかわりが深い。竜は中空を飛行して雨や雲をおこしたり、蛇の形をした稲妻を放つとされる。」(『日本大百科全書(ニッポニカ)』(ジャパンナレッジ版)の「竜」の項目) とのことである。

龍と雲に関しては、雲龍、雲龍文が有名である。これに関しては、次のような記述を紹介しておく。「龍吟ずれば雲起こる (中略) 推測になってしまうのだが、雲龍文の存在から見出しのような言い回しが生まれた図像主導型のことわざの最たるものと見られる。そこでこうした図像を雲龍文とみると、これは中国と日本で最大級の数量になる文様であり、古来から無数にある。表現された物も多岐にわたっており、これまた挙げることができないくらいにきりなく存在する。中国では龍が皇帝のシンボルであったことから靈獣として最高の位置にあったからだ。こうした中国での龍の存在が古代の日本に影響し、日本での図像化が行われたものと推測される。」(時田 (2009) 756頁)

(3) 天に昇る・翼 [強者・英雄]

- ① 龍に翼を得たる如し／龍に翼 (強いものにさらに強さを加えること。)
- ② 龍は一寸にして昇天の気あり (龍の子は一寸ほどの大きさの頃から昇天しようとする気概がある。優れた人物には幼時から非凡なところがある。)

中国における龍と昇天に関しては次のような記述がある。「龍と皇帝との結合は天空を飛翔する龍の観念を生んだと考えられる。天の意を承けて地上世界を治める一方、天の極点である紫微星の位置に坐するともみられていた皇帝と同様に、龍もふだんは水に棲みながら天にもはるるのである。」(荒川 (1996) 23-24頁)

日本における龍と昇天に関しては次のような記述がある。「わが国でも同様な考え方はあって、竜神は竜巻のときに昇天するのだという。沖縄には次

のような昔話がある。男が桑の木の根元に寝ているハブをみつける。目を覚ましたハブは仙人に姿を変え、山で千年、海で千年、丘で千年過ごすとして天に昇って竜になれるが、それを人に見られては昇れないので、このことを絶対に他言しないという約束で昇天する。男は約束を守り一時裕福になるが、あるときうっかり口にしてしまい、以後はもとの貧乏に戻るという内容の話である。青森県の話には、大蛇が、桂（かつら）の大木がじゃまになって昇天できないと木こりに訴える。そこで木こりはその桂の木を伐（き）って昇天させたという例がある。地上の蛇が年月を経て昇天し竜になるというモチーフは、蛇信仰が竜神信仰へと変化していく過程とみなされる。」（『日本大百科全書（ニッポニカ）』（ジャパナレッジ版）の「竜」の項目）

なお、ヨーロッパの龍には多く羽根がある。「ヨーロッパのほとんどの龍には羽根があるが、逆に東洋の龍は一般的には羽根がない。だいたい常識的には、ヨーロッパは論理的だから、天空を飛ぶ怪物であれば必然的に羽根があるだろうという理由が語られている。しかし、必ずしもそうではなく、いまから述べる聖ミカエルの問題、つまり天から墮落した、降りたというところに羽根をつける理由が生まれてくることを無視してはならない。」（田中（2006）97-98頁）とのことである。

ちなみに、日本の龍には四脚が書かれないものが多いそうだ。「〈日本〉の龍のイメージには、前述したように蛇が前提となっていた。オロチ・大蛇が龍になったともいえるほどに。基層信仰といってしまうえば簡単だが、ともかく龍は大蛇と緊密に結びついたイメージとして育ち、定着してきた経緯がある。だから、〈日本〉の龍には四脚が描かれないものが多いのではないか。脚がなくとも変ではなかったのであるまいか。」（黒田（2003）112頁）

(4) 天地の間にいる [強者・英雄]

- ① 龍は時を得て天地に蟠（わだかま）る（龍は時機に会うと天地の間にとぐろを巻く。英雄豪傑が好機を得て天下に覇を唱えること。）

(5) 鬚 [強者・英雄] [危険]

- ① 龍の鬚を蟻が狙う（自分の力の弱いことを顧みずに大それたことを望んだり、弱者が強者に挑んだりすること。）
- ② 龍の鬚を撫で虎の尾を踏む（大きな危険を冒すこと。）

(6) 龍それ自体 [強者・英雄] [変幻自在]

- ① 龍虎の争い／龍虎相搏（あいう）つ（いずれ劣らぬ英雄・豪傑・強豪などが勝負すること。）
- ② 時至れば蚯蚓（みみず）も龍となる（よい時機に巡り合うと、つまらない者でも出世して権勢をふるうこと。）

- ③ 用うれば蚯蚓（みみず）も龍となる（登用して相当な地位に置くと、つまらない者でもそれにふさわしい権威や勢力を持つこと。）
- ④ 龍と心得た蛙子（龍のように優れていると思いついでいたわが子が、親と同様の凡才でしかなかったということ。）
- ⑤ 龍の尾と成らんよりは鯛の頭と成れ（大きな集団の末端に連なるよりは、小さな集団でも頭目となるほうがよい。）
- ⑥ 龍は眠りて本体を現わし、人は酔うて本性を現わす（龍は様々な形に変化して容易にその本体を現わさないが、眠りに入ると本体を見せてしまう。それと同じように、人も普段は見せない本性を酒に酔うと現わすものだという事。）

「龍虎の争い」と「龍虎図」については、「龍虎の争い」という「ことば」より「龍虎図」という「絵や図像の例が多く、こちらが言い回しを主導してきたとみられる。（中略）古代からさまざまな領域で、無数の作品が残されている。」（時田（2009）757頁）とのことである。

なお、龍と皇帝との結合については次のような記述がある。「古ヨーロッパ」では旧石器時代から女性像や男根像が狩猟や採集のための呪的シンボルであった、農耕が出現して以降も農耕に不可欠な降雨の制御に関して女性像や男根像による呪術を踏襲した、蛇の再生と不死性（冬眠や脱皮）や性の呪的シンボルであった男根との形態的な類似性などにより蛇が作物の豊饒と関係づけられ、水に関わる蛇の信仰が生まれた（以上、荒川（1996）82-91頁の要約）。「蛇の信仰は全地球的な広がりをもつたのだが、しかし、角や足をもつ複合動物の「龍らしい龍」の発生がみられたのは中国とメソポタミアだけであった。」（同前書106-107頁）、「メソポタミアの龍はメソポタミアの地で、新石器時代からの蛇の信仰をもとに、侵略者であったシュメールの政治権力とティグリスとユーフラテスの大河とから生まれたといえるのである。（中略）中国の龍についても、その誕生の背景と歴史はメソポタミアによく似ている。」（同前書109頁）、「中国でも為政者の関心が黄河の治水と灌漑にむけられるとともに、蛇は龍に変容したと考えられよう。それは大河・黄河のシンボルとしても、天子の権力の強大さを示すシンボルとしても、巨大でかぎりにくく強力な獣が創造されねばならなかったのである。ただし、中国の龍は権力者の敵対者とみなされない。逆に、もっとも聖なる動物であった。しかも、中国の龍は河や水の神であると同時に、河や水を治める王権のシンボルでもあった。（中略）農耕民が蛇に求めたのは自然を動かさうる呪力であった。蛇は雨を恵む動物であると考えていたのである。そのような蛇を原形としながらも、龍は被支配者としての人間に向けられた権力意志の表現、権力のシンボルであれ、反権力のシンボルであれ、国家権力と不可分なものだったのである。」（同前書110-111頁）

(7) その他 [あり得ないこと・意外なこと]

- ① 天水桶に龍 (ありえないことのとえ。)
- ② 灰吹きから龍が上がる (意外な所から意外な物が出る。ありえないこと、また、途方もないことのとえ。)
- ③ 足元から龍 (たつ) が上がる (身近に意外なことが突然起こることのとえ。)

3 終わりに

想像上の動物である龍は、以上に見てきたように、「強者・英雄」〔危険〕という特徴を捉えたことわざが多い。

日本や中国以外にも、世界中にはさまざまな「龍」が存在する (荒川 (1996))。しかし、『世界ことわざ大事典』(柴田他 (編) (1995)) では、巻末索引に基づく「龍」を含む句は次の4句しか挙げられていないが、やはり龍には主に「強者・英雄」という特徴が示されている。

「どぶ川から龍が出る」(龍は大河から昇天しどぶ川には棲まない。貧しい家、低い家柄から科挙に合格するような人物の出てくること。)(朝鮮)、「龍も浅瀬にいれば蝦にからかわれ、虎も平野にいれば犬にばかにされる」(所を得なければ、強者も弱者に愚弄されることがある。)(中国 (漢民族))、「魚の頭を叩いたのに、竜の頭が揺れる」(よくない話はすぐに響き渡る。)(ラオス)、「龍が欲する青き水は、いつか尽きる 虎が跳躍する黒山は、いつかくずれる」(いつまでも同じ状態は続かないこと。因果はまわること。)(シルクロード (西夏))

以上、本稿では、「龍」に関することわざを示しながら、「龍」に対する見方や捉え方の特徴を見た。

注

- 1 『故事俗信ことわざ大辞典』(第一版及び第二版)(尚学図書(編)(1982)及び北村(編)(2012))の「総語彙索引」及び「見出しキーワード」検索による「たつ(辰)」の項の7句は、慣用句「辰を上げる(盗むこと)」のほかは、「辰に巻いて巳にこぼす(辰の日は晴れて巳の日は降ること)」など地方の俗信及び俚諺であり、いずれも「辰年」「辰の日」の意で使われている。本稿では、「龍(竜)」「たつ」及び「龍(竜)」「りょう、りゅう」の漢字表記・読みを含むことわざを対象とする。「龍・竜」の漢字表記に関しては「龍」を用いる。
- 2 『故事俗信ことわざ大辞典』(第二版)に漢籍類の出典が示されていない表現を日本のことわざとみなす。

参考文献

- 荒川紘(1996)『龍の起源』紀伊國屋書店
北村孝一(編)(2012)『故事俗信ことわざ大辞典』(第二版)小学館

- 黒田日出男（2003）『龍の棲む日本』岩波書店（岩波新書）
- 柴田武・谷川俊太郎・矢川澄子（編）（1995）『世界ことわざ大事典』大修館書店
- 尚学図書（編）（1982）『故事俗信ことわざ大辞典』（第一版）小学館
- 田中英道（2006）「第三章 西洋のドラゴンと東洋の龍——デューラーとレオナルド・ダ・ヴィンチの作品をめぐって」安田喜憲（編）『龍の文明史』八坂書房
- 時田昌瑞（2009）『図説ことわざ事典』東京書籍
- 『日本大百科全書（ニッポニカ）』小学館（ジャパンナレッジ版）
- 馬場俊臣（2010）「「牛」に関することわざ——牛の何をどう捉えてきたか——」『札幌国語研究』15（北海道教育大学国語国文学会・札幌）
- 馬場俊臣（2011）「「虎」に関することわざ類——虎をどう捉えてきたか——」『札幌国語研究』16（北海道教育大学国語国文学会・札幌）
- 馬場俊臣（2012）「「兎」に関することわざ——兎をどう捉えてきたか——」『札幌国語研究』17（北海道教育大学国語国文学会・札幌）

付記 本稿は、平成24年度北海道教育大学札幌校公開講座「文学に見られる動物たち（Ⅵ）——タツ—— 第3回 日本語とタツ」（平成24年8月25日）の講演資料の一部に修正を加えたものである。